

# プロの手仕事を見に行く

作り手の顔がわかる、ず〜っと愛用したいモノ。「ものづくり」のプロにはその素材が「好き」という共通項があった。

「織り始めると集中します」という明石さん



## 糸

### スコットランドチエックに魅せられて

手織工房タリフ 明石恵子さん

清瀬駅近くの工房を訪ねると、壁に

は織られたチエックの服地や見本が掛けられ、棚にはカラフルな糸がズラリ。常時50色の色があるという。そして大小の織機が5台ほど稼働中。羊毛の本場スコットランドでも、手織りは失われつつある今、本場の毛糸を直輸入して織っているのが明石恵子さんだ。

子どもの頃から手織りに関心があった明石さんは、英国語学留学中に手織コースを体験し、英国の織物に魅せられた。その後、スコットランドでデイベッド・ガーニー氏から直接、服地の織りを学んだ。子育ての後織りを再開し、作品展示会、また手織り講習会をスコットランドで開催する企画を5年間にわ

たり毎夏続けた。

2004年に「手織工房タリフ」を立ち上げ、自身の作品を作るだけでなく、生徒さんに教え、直輸入した毛糸の販売も手がけている。この毛糸は工業用の紡績糸で糸に油がついているため、織り作業中の毛羽立ちが抑えられる。織りあげてから洗うと糸がふくらんで、フェルト化し柔らかな布になるという。実際、明石さんが手織りのコースターを熱めのお湯につけ、弱アルカリの石けんでごしごし洗って実践してください。すると糸の目が詰まり、洗う前のチエックとはまるで印象が違う、柔らかな風合いのコースター

に。魔法にかけられたようだった。「スコットランドの工業用糸特有のこの変化に惹かれるんですよ」と明石さん。



に。魔法にかけられたようだった。「スコットランドの工業用糸特有のこの変化に惹かれるんですよ」と明石さん。



上) スコットランド直輸入の糸が並ぶ  
右) 織ったグレンチエックで仕立てたお洒落なスーツ  
下) 息子さんへお祝いのジャケット

15%位縮むので、その縮小率を見込んで計算して織るのだそう。タータンチエック、グレンチエック、千鳥格子など規則的な配列の柄でも、色の組み合わせを逆にしたり、配置を変えたりすると、全く表情が違うものになる。伝統的な基礎から始めて、自分のデザインしたチエックを織れるようになるのも魅力だ。

スコットランドチエックには長い歴史がある。タータンはスコットランド氏族の象徴。グレンチエックはネス湖畔のアーカート渓谷領主が自分の領地のチエックが欲しいと作ったデザインだとか。「こんなスコットランドチエックの裏に有る背景から、歴史へと興味が湧きました。たかがチエック、されどチエック。知れば知るほど奥が深いのです」

息子さんの就職祝いに、ジャケットをプレゼントした。母が織ったグレンチエックをテラーに仕立ててもらった世界に一つのジャケット。何とないたいだろうか。息子さんにとって一生の宝物になるはずだ。

今後も「沢山の人にチエックの楽しみを広げていきたい。チエックの魔力はとて強いです」と明石さん。

清瀬市元町1-113 メース清瀬202  
Tel/Fax 042(492)6292



# 陶

## 感動から生まれる器たち

陶芸家 梶山友里さん

「粘土をさわっている時が一番幸せ」という梶山友里さんは若い陶芸家。2006年に武蔵野美術大学陶磁専攻を卒業し、同大通信教育課程研究室の助手を経て独立。現在はギャラリーやデパートでの個展やグループ展開催、また作品をショップに委託して販売している。日常使いのフリーカップや皿、花器からアクセサリーまで。モダンで温かく、マット釉薬が主のナチュラルな色合いの作品にはファンが多く、個展に来るリピーターを増やしている。



上)「シニアの陶芸教室」講師を務める梶山さん  
右)制作中の花のレリーフ



花のレリーフシリーズのマグカップ(上)と、壁掛けの花入れ(右)

いた。中には1センチに満たない小花も。ぱっと見た目には落雁にそっくり。「父が和菓子職人で今は学校で教えているんです」と聞いて納得。幼い頃から父の手を見てきたのでしょうか。この花のレリーフは昨年自主研修で北欧に1ヶ月間滞在した時に始まる。各地のアトリエを巡り、いろいろな作家に出会った。春から夏に変わる自然は美しく、雪山から一斉に野の花が咲き始め、街中に花畑が広がっていく風景に感動。「植物文様を暮らしに取り入れたものを作りたい」と作り始めたものだ。小さな花は器やカップに付けられ、梶山さん

独自の世界を表現する。「最近を作っている人らしい作品だと言われます(笑)」そう、作り手同様にどこか柔らかで、おおらかだ。

この春、結婚と同時に練馬区から小平に越してきた。「自分も料理を作るようになって、実用的でデザイン性があるもの、美味しく感じられるものをつくりたい。器は使われていくことで、生活になじんでいくものですから」。お客さんの中には、購入した器が気に入り、それに料理を盛り付けた写真を送ってくれる人もいます。

# 革

## 一点もののバッグをつくる

手創りかばん工房 Kurakow(クラクフ) 橋本直巳さん

西武柳沢駅北口の商店街の中にある工房を兼ねた店舗。橋本直巳さんはオーダーメイドの革製品を作っている。店奥の工房の壁には全国から届く注文票が所狭しと貼ってある。「一つ一つを頭にいれるのが大変です」と橋本さん。

もともとバッグメーカーの営業をやっていた。「自分で一から創作バッグを作りたい」と15年勤務の後2年を開業準備に充て修業をつんだ。会社員時代、バッグのサンプル作りを間近

アクセサリーにしてもブローチ、帯留め、髪留め、ボタンなど陶器で表現できるものへ果敢にチャレンジ。和菓子とのコラボなど、確かな技術に加えて、キラキラ輝くセンスには限りない可能性が秘められている。

「梶山友里個展 秋を彩るうつわ」  
11月6日(水)〜11日(月)  
ギャラリーSPACE KOH  
(西武柳沢駅すぐ)  
☎042(468)8558  
梶山さん問合わせ  
info@yurikajiyama.ciao.jp



裁断中の橋本さん  
後の壁には注文票が。

でみてきたので、独学で技術を習得してきた。この地で父親が靴店を営んでいたため、実家に戻り開業。  
注文を受けると、お客と綿密な打



ち合わせをしながらデザイン画を描き、パターンをつくる。これが仕上げのすべてを決めるので、時間をかける。そして裁断し、革が重なるパーツの部分を革すき機で薄くする。そのあとミシンをかけ付属品をつけて完成だが、この工程を橋本さん一人でやっているのだ。

革製品の修理やリメイクも受け付けているが、オーダーが半分以上を占める。かつて通勤用のバッグを作る際、38個のポケットを付けて、というオーダーもあったとか。薬を入れる小から大までのポケットをつける、気が遠くなりそうな注文だ。しかし「その注文をこなして、一歩階段を上った気分だった」と橋本さん。儲けは二の次、プロ魂は何事も可能にしていく。窓口は一つだからアフターサービスも万全だ。「革は自然のもので、最後は土に還るものです。革の部分によって表情が



右) かわいいベビー靴  
上) シンプルで実用的なバッグ



違うのが魅力ですね。使えば使うほどいい味がでてきます」

店内にはトートバッグやリュック式バッグなどシンプルで多機能なオリジナル商品が多く、小型バッグは1万円台からある。財布や名刺入れなど小物もいっぱい。中でも手のひらに乗るようなベビー靴がカラフルに並んでいるのが目につく。これは結婚祝いや出産祝いの贈り物として利用されている

## 硝子

### ガラスアートのチャレンジジャー

アトリエ ホボ 保母祥子さん

ステンドグラスの制作を始めて37年。本で作品を見て気に入った作家のアトリエを訪ね、生徒志願をしたのがスタートだった。ホテルや駅、空港のKトラウンジ、学校のチャペル、一般住宅などさまざまな場所にガラスアート作品を手がけてきた。

現在、都内のお寺から発注された、新しく造る八角形の納経堂の欄間制作という大作に取り組んでいる。注文されたテーマは會我齋白の「雲竜図」。迫力ある頭部分が工房で制作中だった。龍の眼や牙が立体的につくられ、特にお腕をひっくり返したような眼の部分に苦心したという。窯で焼いて、ガラスにカーブをつける。その曲り具

る。玄関にベビースューズを飾ると幸運が訪れるとか。

「これからもお客様のライフスタイルにフィットするバッグを提案して、未永く使っていたいただけるものを作りたい」と橋本さん。

西東京市保谷町3-10-16  
Tel/Fax 042(461)0752



「ものづくりはどーんと構えて」という保母さん

合に試行錯誤を繰り返した。来年夏まで1年がかりの制作、保母さんの手が緩む暇はない

ステンドグラスは色板ガラスをカットして、鉛線に挟みながら組んでいき、そのジョイント部分をハンダ付けして、鉛線とガラスの間

にパテを詰め固定していく。技術に加えて、デザイン力や色彩感覚も必要だ。工房では教室も開かれ、長年通って来る生徒さんが多い。

結婚祝いの贈り物として、ランプをオーダーするお客もいる。その中で保母さんが忘れられないことがある。「数年前、男の人がいらして、ランプを買われたの。お巡りさんで今度定年退職して信州に帰るので、記念にしたい」と。その人は毎日アトリエの前を通り、ウインドウ越しに見る美しいランプに惹かれていた。いつか手に入れたいと願いつつ、定年という節目に実現させた。ステンドグラスの彩りにはこんな夢と憧れがまつまっているようだ。

西東京市南町1-5-10  
Tel 042(463)5716



上) 人気があるウサギの頭  
左) 京王永福駅にある作品

